

環境省 大気環境局水環境課閉鎖性海域対策室内

有明海・八代海総合調査評価委員会 御中 (FAX 03—3501—2717)

1. 氏名 大鋸豊久
2. 職業 自営業 (造船業)
3. 住所 佐賀県*****
4. TEL *****
5. FAX *****

**** 【 「委員会報告案」に関する意見 】 *****

[4章 問題点とその原因・要因の考察]

[5章 再生への取り組み] . . . に付いて

この度の「有明海・八代海再生特別措置法」に対しての調査をして主務大臣に意見を述べる事を所掌事務とする「有明海・八代海総合調査評価委員会」の[委員会報告案]の報告書の作成は膨大な調査・資料のまとめ大変ご苦労さまでした。

先ず最初に申し上げたいのは、[評価委員会までの流れ]であります。有明海の海の異変が顕著に現れた 2000 年初めの海苔不作での漁民騒動が発端としての「漁民側の言い分」として

■ 【国営諫早湾干拓事業】が出来てから海が変わった

■ 潮受け堤防排水門からの排水----「富栄養化した水の排水」「土壌 (固化) 改良剤」を大量に使用しそれを含んだ排水」-----が異変の原因ではないか？

-----等々のどちらにしても、有明海の異変は潮受け堤防が建設され諫早湾の三分の一を閉め切ってから劇的に変わった、「どうしてくれるんだ」---という激しい漁民騒動が長期化し収拾が大変困難な状況の中で、当時の農林水産省の谷津大臣が「ノリ不作第三者委員会」を立ち上げて審議する機関が設けられ、2年間ほどの審議の後「短期 中期 長期の開門調査を実施し、異変の原因を究明し、漁業被害を解決すべし」----という提言がなされたもので、その後 短期の開門調査は1ヶ月間ほど実施されましたが、「原因は良く分からない」という結果報告が農水省からなされています。

その後「有明海・八代海再生特別措置法」が立法化され実施されています。その特別措置法により、覆砂事業や海底耕運・人工干潟の造成・湧昇流発生装置・ハトエイの駆除・下水道整備 等々の事業が実施されています。私は海岸域で生活しておりますが、かつて一度も ----近所の或いは他の地域の漁民-----が、その措置法の施策によって、「海況が良くなった、海が再生した」という話は全く一度も聞いた事はなく、状況は時間と共に海的环境と人々の生活する環境がどんどん悪化しており、沿岸の漁村が「根本の経

済基盤の漁業」が壊れて地域全体が沈没していき、過疎化（若者が居なくなる）と共にさびれていく、その只中にあると言えます。

「ノリ不作第三者委員会」で審議して解決する筈の「有明海異変・漁業被害」の問題は何ら解決する目処も付かず、審議する場は事実上「有明海・八代海総合調査評価委員会」に移ったものと現場の地域の人たちは理解しています。でありますので貴委員会には、名目や建前がどうであれ、有明海異変の問題を解決する重大な責任があると思います。

ノリ不作の騒動（2000年）から現在まで約7年、潮受け堤防締め切り（1997年4月）からほぼ10年経とうとしておりますが、「原因は判らないと言いつつ、こういう事業をします、あれもします、調査はこれからも色々やっています」-----という姿勢は何なのでしょう？そのような中に「根本の原因」として地域の沿岸漁民住民が誰もが考えている【諫早干拓による潮受け堤防の締め切りでの影響としての潮流の変化】の事を文言として入れないというのは一体何故なのか？びっくりするほど沢山の事柄を綿密に調査していて、色々な環境の異変は出ているが「何故そうなるのか？」という問題は「敢えて避ける」姿勢の中に「今後10年経っても原因は判らない」----という結論しか出ないだろう・・・という確信に近い思いがあります。全ての問題の原因は判っているのに避けて通る。諫早湾内のタイラギ二枚貝の1993年頃からの斃死の問題での「諫早湾漁場影響調査委員会」の報告書も12年ほどの時間をかけても「原因は判らない」という結論でありました。とんでもない無責任なものです。

このような無責任な委員会ではいけない。住民は本当に苦しんでいます。漁業はまさに崩壊寸前です。近所に自殺者もちらほらと居るのです。かつて有明海と諫早湾は大変豊かな食料生産の場であり地域の人々の生活を支えてくれる命の海でした。それが現在は瀕死の弱りきった海になっていて人々の生活を支えてはくれません。この海が根本の原因としての速い潮流を取り戻さなければ海が復活しない-----というのは誰もが知っています。どうすればその潮流が回復するか？-----というのも分かっています。自分の勝手な考えであります、日本の食糧・食を考えた時に、これからの地球の気候は温暖化の進行で海水面の上昇や異常気象が多発する傾向にあり、アメリカやオーストラリアなどの穀倉地帯での収穫が異常気象等で不作になる危険性があると考えられています。現にオーストラリアは今年は大不作に見舞われています。また中国があらゆる資源の輸入国となり13億の民の食料も大量に輸入する国となっています。またその隣国のインドにも11億の民がいて、段々豊かになり食料の大量輸入国予備軍として控えています。今年地球全体での穀物の生産が初めて需要を下回った・・・そうであります（それでも未だ備蓄が充分あるので、今のところは心配ない—という事になっているそうですが）。

何が申したいかと言いますと、今後食料が不足すると予測されている中で また、日本の食料自給率が40%しかない中で、そして日本の沿岸漁業が衰退している現状の時に この豊かな食糧生産の場としての有明海を本当に潰して良いのか？-----というのを委員の先生方に聞きたいと思います。このままでは有明海の（海苔以外の）一般漁船漁業は間違いなく潰れます（辛うじて海苔養殖漁業は持ち堪えています）。そしてその有明海漁業・再生の鍵を握るのは「貴委員会」であるという事であります。・・・これまで かれこれ7年～10年（諫早湾内漁業は15年位）経過する有明海異変と、それに付随する当局の調査で未だに根本原因は分からない・・・で ここまで来ています。「これから先未だ5年も10年も調査します」とはどうぞお願いだから言わないで下さい。本当の結論と対策を打ち出して欲しいと思います。政治的な思惑や背景ではなく日本の将来のわれわれの子孫のために、「食」の問題に取り組んで欲しいと思いますし、何より今現在苦しんでいる有明海沿岸漁民・住民を、日本の田舎を救って下さい。官僚の方も研究者の委員の方も政治と行政は誰のためにあるのか？真剣に考えていただきたい---と念願する次第です。そしてそのためにエネルギーを集中して欲しいと思います。本当の民主主義を現して欲しいと思います。

[5章 再生への取り組み] 3. 具体的な再生方策・・・の中で、(1) 底層環境の改善 (2) 沿岸域の環境保全、回復 (3) 貧酸素水塊等への対策・・・。

また4. 解明すべき課題・・・等々の中で、いろいろ計画提案をされておりますが、やはり其々の項目での対症療法的な施策でまとめてあって、それなりの個別対応策として評価しますが、やはり根本原因の解明での根本解決を図るものにはなっておらず、読むにつれていらいらがつのるような思いが致します。これだけの問題が発生しているのに、現場のわれわれでもその根本原因は「これだ！」と考えられるのに専門家の先生方がその指摘をなされない・・・というのは本当に不思議でならない。何故漁民が一番懸念している「諫早湾干拓事業」（潮受け堤防）を取り上げないのか？ 諫早湾の奥部三分の一を閉め切ることによる外部海域への影響・・・という視点での考察をしないのか？あまりにも当然過ぎる検討されるべき問題点であるのに触りもしないというのは、全くもって不自然であり恣意的だと思います。

有明海異変の最大の問題は海底の生態系の破壊にあると思います。特に夏場の海水の高温状態（摂氏 30℃前後）での有りようは、潮流の速度の鈍化による影響でその小潮時の海の状態は、実際に海面は見渡す限り赤潮が広がり、海底は「西海区水産研究所の有明海貧酸素水塊広域連続観測」のデータでも、例えば、平成16年度のデータの6月～10月などで、小潮時の有明海・諫早湾ほぼ全域水面下5M 以下が全て酸欠状態

となっていて、それが小潮の度ごとに大規模長期化しており、とても生物が生息出来る状況ではなく、これが相当な破壊力で海底付近の生態系を壊しているのが現実の海とデータの突合せで実感しています。今年（18年夏）も大規模・広域化・長期化の時期があり、魚類・エビ・タコ・カニなど何も捕れない時期が一ヶ月ほど続いたりもしました。

このような実感と共に、現実の海に出て漁をする人々が生活する人達が沢山居るといふ事を 報告書をまとめる委員の先生方はどうぞ理解して欲しいと思います。大半の漁民は異変の原因が何であるか・・・というのを認識しています。そしてそのような現実の中で希望が持てずに、大きな失望感の中で、（絶望と言い換えても良い）暮らしています。沈黙している人々の声は皆さまには 聞こえないかも知れませんが、熱い思いで海と それに関わる人々を救ってくれるのを待っています。

この委員会の結論を出される先生方は、このままの曖昧な 焦点をボカしたままの救わない「永遠に調査し続ける報告書」では、実際に漁民と地域の人々を救うことは出来ません。これだけの実に見事な各項目の調査データを出して、日本でも一流の専門の先生方が揃っていて---「原因は判らない」---という結論では、「有明海は救わない、漁業は潰れろ、漁民は死ね」・・・という事であると認識されます。

どうか委員の先生方には、潮受け堤防・「開門調査」または「水門の常時開放（コントロールされた開門）」により海が回復する事の証明が出来るように、そして「本当の有明海の再生策」によって【真の海の再生】が実現し有明海沿岸の漁業を守って欲しいと思います。これまでのような対症療法的な再生策の繰り返しや果てしなく続く調査で本当の原因が分かる事になったり 海が蘇るとは誰も思っておりません。ご心配なく。もう既に原因は判っており、唯その結論を出す決心をして実施するところの決断であると思われまふ。どうぞよろしくお願い致します。

失礼は省みず 有明海沿岸の現場からの声として わたくしの思いを本音で述べさせていただきました。大変失礼で不躰な記述があったところはお詫びを申しあげます。現地の状況は疲弊の度合いがどんどんと進んでいて地方の一次産業やその経済基盤が加速度的に崩壊しているのを実感しています。手遅れにならないうちに有効な対策が必要不可欠であると思ひます。